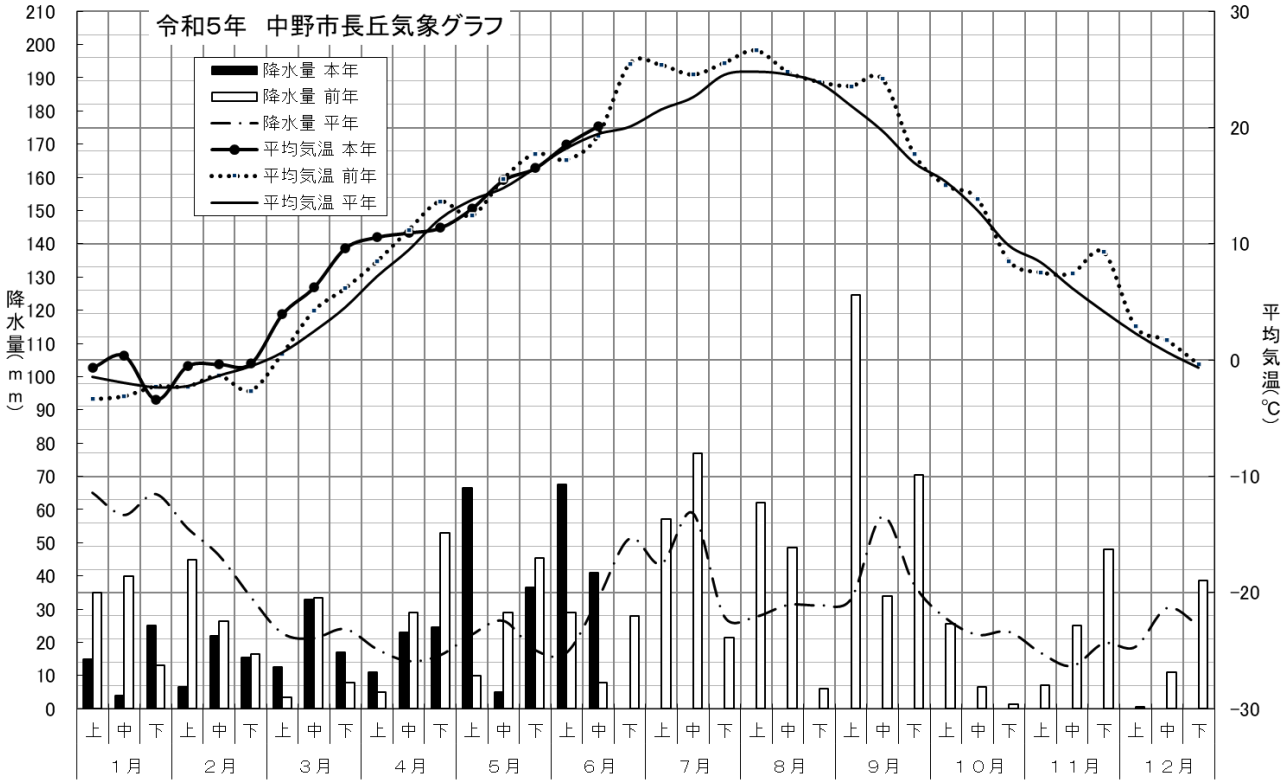
農 作 物 生 育 概 況

令和５年６月 27 日現在



【作　物】

＜水　稲＞

田植えは５月 27 日がピークで、６月 10 日にはおおむね終了した。

育苗中に、ばか苗病や籾枯細菌病が見られたほか、苗立ち枯れ症状も散見された。

田植え以降の気温は、ほぼ平年並みであり、生育状況も平年並みであるが、標高の高い地区では、やや生育は遅れ気味である。

オモダカの発生が多い水田が目立つ。

一部ではイナゴの発生が早く、発生量も多い。６月 12、16 日に葉いもち感染好適条件が整っているが、その後降雨少なく、発生はないと思われる。

＜小　麦＞

平年よりも早い５月下旬に出穂となっている。成熟の早い品種は６月 26 日頃から収穫が始まる。

出穂後に定期的な降雨があるため、赤かび病が散見されている。また、立枯病が連作ほ場で見られている。全般に雑草の発生量は多い。

【果　樹】

＜りんご＞

新梢伸長が止まる時期であるが、着果が少ない園地では止まりが悪く、再伸長の動きも見られる。新梢の長さも例年より長く、葉色も濃い園地が目立つ。

病害虫では、黒星病の発生が目立っており、褐斑病の発生も一部で確認された。降雨が多いことから、散布間隔をあけないこと、むらなく散布することなど、防除の徹底を啓発している。

＜ぶどう＞

６月は気温、特に夜温が低く推移したことで、生育は当初より遅くなり、平年並みからやや遅れた。新梢伸長がばらつき、開花期に夜温が低い日が続いたこともあり、開花は大きくばらついた。満開期のジベレリン処理についても適期の見極めが難しく、落蕾や着粒が少ない園地もある。「巨峰」、「ピオーネ」、「ナガノパープル」等では、花冠（キャップ）が取れにくかったため、サビ果が目立っている。防除死角等での黒とう病の発生が目立っている。

＜核果類＞

プラム「大石早生」の収穫は早いところで６月 24 日頃からと昨年より４，５日早く始まった。着果が少ないことに加え、幼果の擦れ等によりサビが目立つ園地もある。スモモヒメシンクイによる果実被害も見られており、基本的な防除の徹底を呼びかけている。

ももの果実肥大は順調だが、せん孔細菌病の果実病斑が目立っている。

＜な　し＞

日本なしの着果が少ない園地では、新梢伸長が旺盛となっている。また、番花の遅い花や遅れ花で結実させた園地も多いことから、果実もやや小さい傾向。

【野　菜】

＜アスパラガス＞

露地は６月上旬で収穫を打ち切り、立茎が始まった。半促成では、立茎が終了し、早いところで夏芽の収穫が始まった。

＜白ネギ＞

定植後１～２か月、生育はほぼ順調。早出しを狙った３～４月植を中心に６月上旬から葉枯病の先枯れ病斑が多くみられる。

＜きゅうり＞

露地は、5 月上旬定植は 6 月の夜温が低かったため生育が 5 日程遅れた。ＪＡ中野市では 6 月 16 日（昨年 6/13）から出荷が始まっている。

【花　き】

＜シャクヤク＞

6 月中旬には全地域で出荷はおおむね終了しており、現在は株養成開始。凍霜害の影響から出荷本数は減少傾向。今後は出荷規格の見直し等検討を進める。

＜トルコギキョウ＞

例年より 1 週間から 10 日ほど生育は進んでおり、ハウス加温作型で出荷中。その他の作型で、枝整理・花蕾整理が順次行われている。

病害等の発生は、排水性が悪いほ場では生育初期の根痛み等も相まって、立枯病や根腐病の発生、生育不良が見られる。昨年度、土壌消毒で土壌くん蒸材（クロピク等）を実施した場では立枯病等の発生は少ないが、土壌還元消毒のみのほ場では、立ち枯れ症状が見られている。

梅雨明けと同時に日射が強くなり、ブラスチングの発生が懸念されるため遮光資材等で適宜遮光するよう指導を行っている。